史遊会通信

NO.175
平成21年
4月11日
発行

事務局
☎
03--3712
0651
下山田方

三月講演

マテオリッチの『坤輿萬國全圖』

高橋由貴彦

桃山時代から江戸時代の初期に書かれた、ポルトガル人の風俗を中心にした絢爛たる屏風を、南蛮屏風と呼んでいる。同じ頃書かれたものと思われているものに、世界図をあしらった「南蛮世界図屏風」がある。今でも三十図ほど明らかにされているが、当時の人の世界感覚では、「本朝・唐・天竺」の三国が中心として成り立つと信じていたので、この地球的視野の拡大は晴天の霹靂であったに違いない。

ところが十七世紀にはいってすぐに中国から、当時では驚くべき詳細な世界図が飛び込んで来た。

マテオリッチの『坤輿萬國全圖』である。『徳川実紀』の「東照宮御実紀」の慶長十六年（一六一一）九月の項に、それらしき記録がある。

「西域より世界の図来たりしかば、駿府に進ぜられしにご覧ありて、後藤庄三郎光次、長谷川左兵衛藤広を御前に召して、万国の事どもご尋問ありて討論せられたり」とある。長谷川は長崎奉行、後藤は金座の頭人で、この時の世界図は『坤輿萬國全圖』と考えている。

イタリア人宣教師マテオリッチ（一五五二～一六一六）は一五八三年に同じイタリア人のイエズス会東インド管区巡察師のアレッサンドロ・ヴァリニャーノの命により中国布教に赴く。

リッチはまずマカオから肇慶に入って、

例会のお知らせ

◎4月例会

日　時　平成21年4月22日（水）
　　午後6時～8時
会　場　目黒区民センター　7階
　　社会教育館　第2研修室
講　演　千坂精一氏
テーマ　越後長尾氏と景勝・兼續
　　自由執筆は柴田弘武・山本鎮雄・鯨游海の諸氏。
締切り　4月末日

◎　5月例会

日　時　平成21年5月27日（水）
　　午後6時～8時
会　場　目黒区民センター　7階
　　社会教育館　第2研修室
講　演　松川博光氏
テーマ　「近代観の修正」
　　自由執筆は太田精一・隆　恵・中山喬央の諸氏。
締切りは5月末日

中国への第一歩を印すわけだが、マカオでは日本の天正少年使節に会っている。

リッチは当時の頑迷固陋な中国側の強権に対し、ヴァリニャーノが説く現地適応策に基づいて、四書五経による儒教に応身した姿での、キリスト経布教の基盤を築くことができた。

その後、この公教要理に儒教をいれた事が理由となっての典礼問題に発展したが、リッチ自身に対する中国政府の信頼は厚く大きかった。

一六〇一年には明朝の万歴帝神宗に拝謁をゆるされるまでになった。中国名を利瑪竇と称して北京で没したが「大西西泰利先生」と敬愛されて、北京市内の柵覧に墓地まであたえられた（現在：中国共産党学校敷地内）。

これほどまでに尊敬された大きな理由の一つには、初めて漢訳された一連の世界図の著作が挙げられているが、中でも『坤輿萬國全圖』はことさらに際立っていた。他にも漢訳に公教要理の『天主実義』（一六〇三）、ユークリッド幾何学の『幾何原本』（一六〇七）などの著書が知られている。

これらの著書はすべて漢文で書かれているため、いち早く漢字文化圏にもたらされ、わが国にも及ぼした影響は計り知れない。

リッチ世界図の主なものは大きく分けて四つある。

肇慶版（別名『山海輿地全図』）、南京版（肇慶版の改版）、李之藻版（『坤輿萬國全圖』）、李応試版（『両儀玄覧圖』）の四つである。

肇慶版と南京版は残念ながら実在が確認されていない。ところが李之藻版は世界で現在の所四本が確認され、その中で二本が日本にある。宮城県立図書館と京都大学である。残りの二本はヴァチカンと、二十年ほど前にサザビーのオークションにだされたフィリップ・ロビンソン旧蔵図である。

一方李応試版は鮎沢信太郎の調査により、『両儀玄覧圖』がこれに当たることが判明し、この天下の孤本は、現在ソウル崇田大学校博物館に蔵されている由である。

鮎沢論文によると『坤輿圖』と『両儀圖』との両者の内容は、序文以外はほとんど同じで、サイズは後者がふたまわり大きく、他には前者は六幅一組だが、後者は八幅一組になっているとのことである。また内容のうち図中右上の重天図（惑星を中心とした天動説の宇宙観図）は前者が「九重天図」で後者が「十一重天図」で描かれている。

さて、李之藻版を実物大に複製してつぶさに眺めて見ると、その内容の豊富さに驚嘆される。これは単なる世界地図ではないからである。

丈一六七・四センチ、一幅巾六二・九センチのもの六幅で都合左右が三メートル七七センチという、屏風仕立てとなるような壮大な版本に、余白を埋め尽くした所狭しの宇宙天文、地理地勢、暦法民俗、自然環境、はては宗教にいたるまでの、哲学・信仰・思想と自然科学の雑然ながらの記述に埋まっている。

リッチはグレゴリオ暦編纂で主役を果たした暦学者C・クラヴィウスの弟子であったことから見て、いわばこれらの記述は、当時の最先端の世界知識の凝縮であった。

更に重要なことは、それまでのヨーロッパ中心の世界図を中国中心の世界図として試みた、最初の漢籍地図であったことである。言い換えれば、経度の関係から日本中心の世界図となったことは特筆に値する。

これを手にした日本人は、日本を中心に世界を見ることができた最初といっていい。その概念は二十一世紀の今日まで及んでいるのである。

まず、図は右端の冒頭の千五百字からな

る長い序文から始まる。しかし実際の序とも言える地図制作の経緯はここではなくオーストラリア（当時は未発見）の右側の、丁度日本の真下に当たる部分に、リッチ自身の名前での貴重な経過説明がある。

冒頭部分は以下のように始まる。

「陸地と海はもともと円形で、合体して球となる。これは天球宇宙の中にあって、丁度卵の黄味が白味に包まれている様子に似ている。大地は四角だという人がいるが、それは固定不動の属性をいったもので、形体をいったものではない……」と地球の概説を述べ、五大陸と同時に時差の概念にも言及している。

つづいて、李之藻、呉中明、陳民志、揚景淳、祁光宗の製作関係者の跋文に加えて「九重天図」「太陽出入赤道緯度」「日月蝕図」など十一項に及ぶ天文地理が続く。

「九重天図」の位置は右上の同心円の図であるが、アルストテレスの宇宙観を受け継いだチコブラーエの宇宙像がえがかれ、「四行論略」で宇宙の構成要素が述べられている。中でも驚くべきは、惑星の周期の精度の高い数値であろう（添付表参考）。

驚異的正確な数値である。当時まだ望遠鏡のなかった天動説終焉期にあって、ここまでよくも観察されていたものと驚く他はない。

九重天名	坤輿圖記載	現代測定の公転周期(理科年表による)
月	27日31刻(1日は100刻)	27.3217日＝27日32(刻)
水星*	365日23刻	0.2409年＝87日99(刻)
金星*	365日23刻	0.6152年＝224日70(刻)
太陽	365日23刻	1.00年＝365日25(刻)
火星	1年321日93刻	1.8809年＝1年321日75(刻)
木星	11年313日70刻	11.862年＝11年314日85(刻)
土星	29年155日25刻	29.458年＝29年167日28(刻)
28星(恒星)	49000年	25800年(地球の歳差の周期と解釈すると)
無星帯(天の川？)	1日1周	1日1周

『坤輿圖』と現代測定による惑星・公転周期の比較表

※印の水星、金星は地球より太陽に近い軌道を回っている事実から、現代でも観測は難しく、あやまって太陽と同じ公転周期にしたのは止むをえまい。

『坤輿圖』は世界を、歐羅巴、亜細亜、利未亜、南・北亜墨利加、墨瓦臘泥加（オーストラリア・南極で当時未発見の場所）の六つを州として分類し特に朱記させて目立たせた。

リッチの作成資料は、オルテリウスの『世界の舞台図』（一五七〇）、G・メルカトールの『メルカトール投影世界図』、P・プランシュウスの『新世界大地図帳』であった。それに中国に伝えられていた『近国地図』などが底本にされた。

冒頭にも触れたがこの『坤輿圖』の中で一般人が最も興味のあった内容は、世界図の中の地名・地誌注釈であった。わが国では「稲垣子　」の文化年間の異本からの『萬國全圖説』に紹介されている。

イタリア人、P・デリアはトリゴウの『マテオの中国布教史』を根本史料として、ヴァティカンに伝わる『坤輿萬國全圖』からイタリア語の翻訳を一九三八年に発表し、L・ジャイルスは一九一八年に英訳を発表している。

今回はそのあらましを紹介し、往時の日本人が受けたであろう文化的衝撃の姿を偲んだ次第である。

自由執筆

二宮金次郎アラカルト

三戸岡　道夫

昨年の暮から今年の春にかけて、ちょっと二宮金次郎ブームを予兆させるような、いろいろな動きがあった。それをアラカルト風に記してみたい。

昨年は、船村徹作曲、木下龍太郎作詩の二宮金次郎の歌が出来た。そしてそれを歌う歌手、大金吾のディナーショーともいうべき「歌の宴」が、昨年十一月三十日に東京の市ヶ谷で行われた。大金吾は三波春夫ばりの美声の歌手で、時代ものの歌を得意とし、作曲家の船村徹が二宮金次郎の歌を大金吾に歌わせたのも、むべなるかなと思われた。

宴は順調に進み、そのちょうど中間に、新曲発表ということで「二宮金次郎」の歌が披露された。そして歌い終ると、直後に、歌詞が会場の全員に配られて、全員でもう一度合唱したのである。会場は一瞬、二宮金次郎フォークソング喫茶のような雰囲気になり、その巧みな演出に感心した。東京のまん中で、二宮金次郎の歌が大勢で合唱されたことなど、日本で最初のことではあるまいか。

そんな頃、「日経ビジネス」という経済雑誌の記者から電話があり、

「二宮金次郎のことについて聞きたい」

ということで、ある日記者がやってきた。

「狙いは何ですか」

と聞くと、

「サブプライムローンに発した世界的金融恐慌、経済破綻を建て直すには、二宮金次郎の報徳思想だと思うので、お正月号用にそんな特集号を作りたいのです」

ということであった。そこで私は、二宮金次郎の「道徳と経済の一致」の思想を中心に話した。そしてその特集号は、年が明けた平成二十一年一月五日に発売された。

その内容を見ると、まず表紙が二宮金次郎の薪負読書の像で飾られ、「ジャパン・イニシアチブ（日本主導）、無限恐慌の危機を断つ」と赤く大文字で記されていた。世界を襲っている世界経済危機を、日本が主導して救おうというのである。その理由は、日本の経済の根底には道徳が流れているからである。そしてその道徳の中心が二宮金次郎の報徳精神である、という構成であった。

ページをめくると記事の中にも、二宮金次郎の像がふたたび大きくカラーで印刷され、「道徳なき経済は犯罪である」の教えを中心に、道徳と経済の一致の必要性が力説されていた。また中国で開かれた国際二宮尊徳思想学会学術大会の様子や、日本においても道徳と経済を強固に結びつけて経営の近代化に成功した、豊田佐吉、松下幸之助、伊藤忠兵衛、弘世助三郎を採り上げるなど、巾ひろい視野で書かれていた。

すると十二月の同じ頃、栄光出版社の石澤社長から、

「お正月に二宮金次郎の芝居がありますよ」

という電話が入った。二宮金次郎の舞台とは珍しいことである。さっそくそのチラシをファックスで送ってもらうと、一月三十日から三日間、池袋の東京芸術劇場で、「真説・二宮金次郎」と題して、

（知られざる民主的な金次郎の姿が浮き彫りに……、現代が求める世直し男）

というキャッチフレーズで、翌檜座が中心になって上演する舞台であった。

さっそく電話で切符を申しこみ、担当者と話をしていると、休憩時間や、終ってからの客を送り出す音楽に、小学唱歌の二宮金次郎の曲を使うということであった。瞬間、私の頭に船村徹作曲の「二宮金次郎の歌」がひらめいたので、

「新しいこの曲を使ったらどうですか」

と言うと、

「それはいいですね。ぜひ、それでやりたい」

しかしまだCD発売の前なので、勝手にそれを使うことはできない。そこで船村先生の方へお願いすると、心よく許可して下さったので、当日は会場全体が非常に盛り上り、うれしかった。

そして、これもまた十二月のある日のことだった。横浜市の太田善朗さんから、

（二宮金次郎の像がブラジルへ渡る計画が進んでいる）

という電話がかかってきた。その内容は次のようなものであった。今年はブラジル移民百年記念とかで、神奈川県の松沢知事がブラジルを訪れた。するとブラジル神奈川県人会の人達から、

「二宮金次郎の銅像を送ってほしい」

という希望があり、知事はこれを約束して帰ってきた。そこで金次郎の銅像を神奈川県民の力を合せて贈ろうということで、金次郎の像を作る資金集めの推進会が県庁の中に作られ、県民にむかって運動が始ったというニュースを、インターネットで知ったというのであった。

ブラジルへ送るのは金次郎像だけでなく、いろいろな資料や本なども必要だというので、私は『二宮金次郎の一生』の本を十冊ばかりその推進室へ、太田善朗さんに頼んで、持っていってもらった。

金次郎の石像は、年が明けた平成二十一年二月にブラジル・サンパウロ市の神奈川県人会に送られ、二月八日に除幕式が行われた。

アメリカ・ロスアンゼルスの日本人街にも、戦前から巨大な二宮金次郎像があるというが、南米にも金次郎像が出現したわけで、二宮金次郎の国際化のはしりとでも言えようか。

二月一日に二宮金次郎の芝居を見て、興奮がまださめぬ二月三日の夜、テレビに突然、二宮金次郎の像が現れて驚いた。

火曜日の夜にはテレビ東京で「日本ミステリー」という番組があるのだが、その夜の主テーマは川中島合戦で、上杉謙信と武田信玄の秘密を解くというものであった。するとその途中へ、突然、「二宮金次郎像の秘密」が出てきたのであった。なぜ、謙信と信玄の途中に、二宮金次郎が飛びこんできたのであろうか。これも最近の世の中の、二宮金次郎への関心の高まりを反映したものではなかろうか。

すると驚いたことに、さらにその翌日、二月四日の日本経済新聞に、二宮金次郎が登場したのである。

日本経済新聞に「二〇〇年企業」という欄があり、「成長と持続」を条件とする優良企業の紹介を連載しているが、そこに二宮金次郎が登場したのである。

それは明治四年に酒造業を始めて以来、二宮金次郎の報徳精神をもって栄えている浜松市天神町にある、中村雄次が会長をつとめる浜松酒造株式会社であった。中村雄次会長は、同時に大日本報徳社の副社長を

もつとめ、報徳運動の普及にも活躍している。記事は七段組みの大きい紙面であった。

すると、同じ二月四日のサンケイ新聞にも二宮金次郎が大きく登場したので、また驚いた。

サンケイ新聞は水曜日に、教育関係で一ページを編集するが、二月四日は塩谷文科相の写真が大きく写った、教育に関する対談が載っていた。その中で塩谷大臣は、

「教育の基本は道徳である」

と力説していた。その中にとくに二宮金次郎の名前が出ているわけではなかったが、その道徳の中味が報徳精神であることは、明瞭に読み取れた。その記事の右下には、「元気の出る歴史人物講座」というコラム欄があり、この日はその五回目であったが、そこにも二宮金次郎が取り上げられ、その書き出しが、

（いま二宮尊徳が見直されている……）

という言葉で始っていた。

翌日の二月五日には、新宿のホテルで、「東京静岡県人会」が行われた。塩谷文科相も静岡県出身であるので、出席されており、そのスピーチでも、道徳教育の推進を力説されていた。私の頭には昨日のサンケイ新聞の記事のことが頭に強くのこっていたので、スピーチが終わると、

「ぜひ、二宮金次郎の報徳精神で、日本の道徳の推進をお願いいたします」

とご挨拶した。すると塩谷大臣は、

「私も大日本報徳社の榛村社長とはよく話あっておりますから、わかっております」

という力強い返事であった。

以上の他にも、ある小学校で二宮金次郎の石像が復元して、その記念の式が行われたとか、またある小学校では、小学生たちが二宮金次郎の勉強会を開いたとか、その他いろいろな二宮金次郎の新聞記事やニュースが大勢の方たちから寄せられて、うれしい限りである。

また、西宮市の報徳学園（中学校・高等学校）では、『二宮金次郎の一生』の読書感想文である「心田啓発」の第三号をいま作成中であり、近く完成とのことである。早春の草の芽のように、二宮金次郎の顔が多方面に現われてくるのは、大変うれしいことである。

自由執筆

バックで帰って来た

瀧澤　中

「沖縄特攻」

と言うと、特別攻撃隊や戦艦大和を思い浮かべるが、たとえば大和には、軽巡洋艦矢矧と八隻の駆逐艦がこれに従い、沖縄に向かった。

詳細は省くが、大和も矢矧も撃沈され、残ったのは四隻の駆逐艦のみであった。

さて。

先日、知人からこんな連絡があった。

「Aという人が、自分のおじいさんのことを本にまとめたい、というのだけれど、一度会ってくれないか」

A氏は私より少し年上で、おじいさんの名は平山敏夫。かなり前に亡くなっている。

平山敏夫氏は、沖縄特攻で生き残った駆逐艦「涼月」の艦長だった。

私は物書きのアドバイスなどほどほどに、

駆逐艦「涼月」の話を興味深くうかがうことになった。

涼月は米軍機の攻撃で、二番砲塔と艦橋の間に直撃弾、艦尾の至近弾で操舵不能、前部の火災により弾薬が誘爆、被弾による破孔からの大量浸水により前方に傾斜。

沈没してもおかしくない状況であったが、浸水した区画の内部から防水、つまり沈没を防ぐために三名の軍人が自分たちを犠牲にして中からハッチを閉めたのである。

艦は、後進しかできなくなっていた。

艦橋で、平山艦長と倉橋砲術長が、激論を交わした。

断固沖縄に向かうべし、という平山艦長。

もはや戦力にもならない艦では沖縄に行く意味がない、とする倉橋砲術長。

一時間近くに及んだ議論の末、艦は後ろ向きのまま佐世保に戻った。

A氏も私も、その時の平山艦長が愚かだとは思わない。連合艦隊司令長官（豊田副武）が発した訓電には、作戦の目的を「帝国海軍海上部隊の伝統を発揚すると共に其の栄光を後世に伝えんとするに外ならず」としていた。つまり、勝敗ではなく栄光を残せ、という訳である。

いま見れば実におかしなものだが、しかし時代はそれを正気と捉えていた。

特筆すべきは、倉橋砲術長である。

この人は戦後、防衛大学でマネージメントについて教鞭を取っていた。たまたまA氏との会合に同席していた海上自衛隊の関係者が、倉橋氏の教え子だった。

「計算して戦え。そうすれば戦争は勝つ」

防大時代の倉橋氏の言葉であったという。

満身創痍の艦を沖縄に向けようとした平山艦長の熱情と、戻ることの合理性を説いた倉橋砲術長。私には、どちらもいま必要な、強い人間力、という気がしてならない。

さて。戦場からの帰還を決めた涼月だが、超微速後進しかできない。途中潜水艦の雷撃を受けたが、奇跡的にまったく被雷せず、バックしたまま佐世保に戻った。

戦後、涼月は北九州・若松港の防波堤建設のため、そこに埋められた。

駆逐艦は太平洋戦争後半、対空戦闘の機能を特に重視されたが、倉橋氏いわく、「まったくその用をなしていなかった」という。時代の荒波の中で生き残った涼月はいま、響灘の荒波から、私たちを守ってくれている。

自由執筆
大伴家持に思う

島津　隆子

「人間は死や悲惨を考えないために、気晴らしを工夫した」とパスカルは言う。

たしかに人は心配事を忘れ去っている時がいちばん幸せである。例えば囲碁、絵画、ゲームなど等。他に職業を持ちながら和歌を詠むのも、そうしたことの一つの典型かもしれない。

日本が世界に誇りうる国民的大歌集『万葉集』は今からおよそ千二百年前に完成したが、そこに集録されている四千五百十六首の最後を飾る和歌をご存知だろうか。

新しき年の初めの初春の
今日降る雪のいや重け吉事（よごと）

因幡国の役所での新年の宴席で詠んだ大伴家持の作品である。

しんしんと降る白雪のように善い事が積もり重なって欲しいという心情を吐露している。

奈良時代の内舎人である家持の生没年には二説あるが、一説には天平一年（七二九）に生まれ、五十七歳没とされる。越中守、因幡守、陸奥守など諸国を転勤した地方官だが、謀叛に関連したかどで解任されたりして、出世も遅く、決して恵まれた境遇とはいえなかった。しかし、皇室に対する崇拝の念は頗る強く、とくに戦前から戦中に有名だったあの歌は家持の作品である。

海行かば水藻（みづも）く屍（かばね）　山ゆかば草生（む）す屍
大君の邊（へ）にこそ死なめ　のどには死なじ
（かへりみはせじ）

ところが、その家持が天皇の逆鱗に触れ、死後逮捕されるという、悲劇というには余りに奇想天外な運命に見舞われるのだ。桓武帝の御世、長岡京造営の建設長官藤原種継が何者かに暗殺された。犯人はすぐに捕まったが、その調べから、家持の死後二十日余り経った時、事件の首謀者のひとりに家持の名が挙がったのである。

激怒した帝は即刻、家持の逮捕を命じた。だが、陸奥按察使鎮守将軍の任にあった家持は、それより一ヶ月前、赴任地の陸奥国で病死していた。

そこで帝は、家持の遺骸を捕え、隠岐島へ流罪し、生前のすべての官位や財産を剥奪没収、息子の永主（ながぬし）をも流罪とし、越前国加賀百余町没官という過酷な判決を下したのである。

ただこの事件の背景は複雑怪奇で、当時台頭しつつあった藤原一門内部の暗闘、藤原家と大伴家の抗争などが渦巻いていたための、政治的処置ともいわれる。

ともかく歌人で、『万葉集』の代表的編集者のひとり、しかも皇室崇拝者であった家持が、死後とはいえ、このような処置を受けたことは無念の極みであったろう。

家持は柿本人麻呂のような天才的歌人ではなかったが、官吏として報われることの少なかった生涯で、唯一、和歌を気休めとして、心労を癒していたのかもしれない。

日本経済新聞　2009年　3月29日

戦中の社会学辞典を復刻

フロントライン

社会学の分野で国内の辞典として最古という『社会学辞典』（新明正道編著）が復刻、時潮社から刊行された。戦争末期の一九四四年に出版された原著の歴史性や時代性も伝えるため、もとの旧字旧仮名遣いのまま印刷。後年に発表された「解説」を収録したほか、世界の主だった社会学者の生没年一覧表も付け加えた増補版となっている。

日本社会学会の会長も務めた権威、新明氏の手になる原著は「社会学」「社会学史」の二部構成で約千ページに及び、人名・事項別に丁寧な索引もある。企画が動き出したのは四〇年。それから四年をかけ、戦中の過酷な言論・出版統制下で用紙も不足する厳しい状況の中出版にこぎつけた文字通りの労作だ。

復刻版の編集メンバーである山本鎮雄・日本女子大学名誉教授は「これほど体系的に構成された社会学辞典は今に至るまで現れていない」と評する。「現代の社会学で文化や歴史などにまたがる拡散した研究が増えている状況に対し、原点に立ちかえって社会学とは何かと改めて問いかける狙いもある」という。一万二千円。